

〔69〕 ニューヨーク・シティ・バレエ 2004来日公演

バランシンを未来へ投影

2004年10月24日 東京新聞 夕刊

世界的な名声を誇るバレエ団のなかでも、NYCB（ニューヨーク・シティ・バレエ）は他と違って変わっている。というのもレパートリーの大半がジョージ・バランシンとジェローム・ロビンズの作品なのだ。バランシンはNYCBの創立者で、ロビンズは後を継いで芸術監督を務めた人。つまりNYCBはオリジナル作品だけを上演するカンパニーなのである。

歴史的に若いアメリカが自国のバレエ作品を大切にする気持ちはよくわかる。しかしバレエ芸術が日々進化、変容するなかで、限られた数の作品だけを守ることに、どれほどの意味があるのか。旧態を守るNYCBの方針に懐疑的な眼があったのも事実だ。

二十世紀抽象バレエを創出した振付家として、バランシンの人気は非常に高い。レパートリーにバランシンの作品を含まないバレエ団は珍しいし、『チャイコフスキー・パ・ド・ドゥ』などガラ・

〔69〕 ニューヨーク・シティ・バレエ 2004来日公演

バランスを未来へ投影

2004年10月24日 東京新聞 夕刊

コンサートの定番である。折しも今年は生誕百年、日本でもバランスに照明を当てた公演が幾つもあった。そんななかで本家本元のNYCBがどんなバランス・バレエを見せてくれるのか、今回の来日公演には期待と注目が集まっていた。

たとえばBプロの『セレナーデ』。バランスがアメリカではじめて振り付けた作品だが、日本のカンパニーが踊ると、一分のスキなく整然として、もっと透明感がある。それに比べると何ともラフな感じだが、しかしバレエ学校の生徒が踊った初演では、こうだったに違いない。ふっと、あたりに一九二〇年代のアメリカの空気を感じた。

Aプロの『アゴン』では幕開け、四人の男性が奥を向いて並んでいる。その肩幅の広いこと！

こんな体型は、どこのバレエ団にもないだろう。思わずディズニー映画のヒーローを思い出して、「アメリカだ！」と呟いてしまった。

女性ダンサーもそうだ。ふつうバレエダンサー

〔69〕 ニューヨーク・シティ・バレエ 2004来日公演

バランスを未来へ投影

2004年10月24日 東京新聞 夕刊

はもつと肩を下ろし、お腹を引いたポジション（構え）をするのだが、ここのダンサーは胸を開いて、

じつに伸び伸びと踊る。クラシック・バレエの繊細さはないが、しかし『アゴン』の中盤の、体操の床運動のような振付にはそのほうが動きやすい。

太く長い腿ももで男女の体を絡み合わせ、斬新な造型を展開する動きは、最先端のフォーサイスを感じさせる。バランスの中にすでにフォーサイスの萌芽があるという発見に、私は感動した。バランスをクラシカルに踊っている、この道筋は見えなかつただろう。

バランスの中でも、特に現代バレエ的な要素の強い『コンチェルト・バロツコ』（Aプロ）や『ストラヴィンスキー・ヴァイオリン・コンチェルト』（Cプロ）を選んだ演目の構成にも主張が見える。

白と黒のシンプルな衣装ばかりで変化に乏しいが、哲学的なコンセプトは鮮明だ。その代わり、どのプログラムも最後には『スターズ&ストライプス』

[69] ニューヨーク・シティ・バレエ 2004来日公演

バランスを未来へ投影

2004年10月24日 東京新聞 夕刊

『ウェスト・サイド・ストーリー組曲』『フリー・ケ
アーズ?』といったミュージカル調のダンスを置
き、色彩も華やかだし、動きもスウィングして肩
が凝らない。

当初の期待を上まわって面白かったのがバラ
ンとロビンズ以外の新しい作品である。一つは
現芸術監督ピーター・マーティンス振付の『ハ
ルヤ・ジャンクシオン』(Cプロ)で、優美なライ
ンを見せつつハイテンポでシャープな動きを叩き
つける。腰を落とした奇妙なりフトや逆さ吊りな
どもあって、まさにバランスの延長線を行く
現代バレエだ。

もう一つは、新進の専属振付家クリストファー
・ウィールドンの『ポリフォニア』(Bプロ)。は
じめはダンス・クラシックの動きだが、やがて独
創的なテンポと造型に変容して、なかなか刺激的
である。いまNYCBは新しい振付家の育成に積
極的に取り組んでいるが、これもその成果だろう。

〔69〕 ニューヨーク・シティ・バレエ 2004来日公演

バランスを未来へ投影

2004年10月24日 東京新聞 夕刊

今回のNYCBは、他にはない骨太で肉厚なバランスの相貌と、未来への創造的な投影を見せてくれた。バレエが日毎に国際的になり、いわば共通話になりつつある現在、このような独自性を尊重されるべきではないか。